

Title	スペイン語叙法論における否定の役割
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 62 p.1-p.16
Issue Date	1983-03-24
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80949
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スペイン語叙法論における否定の役割

出 口 厚 実

The role of negativity in Spanish mood

Atsumi DEGUCHI

小論は2章で構成されている。第1章では拙稿(1981b)に対して出された高垣(1981, 1982)によるいくつかの批判を検討し、それらに反論すると共に、前稿で提案した「陰否性」の概念を補説し再確認する。第2章の目的は高垣(1982)の直説法有標説のうち、拙稿批判の基盤となっている部分のみを考察し、一部の論者に主張されている「接続法＝従属節標識」説がスペイン語叙法の有効な説明仮説になり得ないことを示唆することである。

This paper consists of two parts. Chapter One examines some objections raised by Takagaki (1982) to my treatment of the Spanish subjunctive. He believes that the concept of *Implicit Negativity* introduced in Deguchi (1981b) is closely parallel to that of Bell (1980)'s "Reduced Assertion". I will show that his affirmation is quite unfounded. I will further show that there are evidence against Takagaki's analysis that independent exclamatory sentences derive from corresponding declaratives. A brief discussion is given of other criticisms that are relevant to my previous analyses.

Chapter Two is devoted to a discussion of the often cited claim that the subjunctive mood is an empty marker of subordination. It is argued that this view is inadequate because the modal concept underlying the mood opposition does not correspond directly to a syntactic status of the clause. In addition statistical data from actual uses will be presented as further evidence against the claim that the occurrence of the subjunctive affix functions as a subordination marker.

I

1.1. Bell の軽減主張と「陰否性」

この項では、Bell(1980)の述べる軽減主張(Reduced assertion)と筆者が前出論文で用いた「陰否性」が同じ若くは類似の概念であるとする高垣(1982:86)の主張が事実に基づかないものであることを指摘する。

拙論(1981b)は、その脱稿前(1980年9月提出)にBell(1980)を参照することができなかったので、当然、彼の所説との相違点を特に対照させるに至っていないが、論旨はむしろ正反対で背反的であるとさえ言える。出口(1981b:27-8)は否定と否定的態度を区別した。それは話者の否認態度の強弱という語用面の対応をもつだけでなく、統語的な証拠が存在することも併示した。この二つの概念は、Gili Gaya(1961:135-6)が既に気づいていた肯定・否定間の種々の中間階梯の考え方と、一見、相通ずるものをもつ[Cf. 出口(1981b:36註12)]。だがGili Gaya

が考慮したのは“potencial”(つまり信念・疑惑節)の接続法・直説法の相関のみで、しかも従属節の叙法のみが対象にされていた。Bell(1980)の‘直接否定’vs.‘軽減された否定’の対立概念もまたこの伝統的な potencial の枠内においてのみ否定・肯定の働きを一元的に見ようとする試みの延長であった。

高垣は否定的態度＝「陰否性」と誤認した上で、出口(1981b)も又このような否定性説を主張しているかのように誤解している。出口(1981b:28)で述べられていたように、“否定的態度(p. ej. *dudar, negar, no creer, etc.*)は「陰否性」という概念の一部を構成する”のであって、等価でない。命令、願望、評価、目的、条件等の各節にも陰否性が含まれることは既説のとおりで、独立主節を含めて文体系全体の中で隠された遠離の“否定”に注目した。否定的態度は陰否性の現われとしては小さな部分に過ぎないのである。

また高垣(1982)の言うように Bell(1980)が接続法全体において否定性の役割を重視しているとは思われない。Bell は Comment 節と非 Comment 節の差異を強調し、‘軽減主張’が判断報告文には適用されるが、Comment 節と間接命令のクラスには該当せず、表層上の類似(i. e. 接続法形を共有)は偶然であるとさえ言い切っている(p. 388)からである。この見解は、例えば命令節と疑惑節の接続法が共通因子、すなわち「陰否性」で誘発されると捉えた拙稿(1981b)と全く相容れぬものであることは明白であろう。

さらに「陰否性」の概念は Bell(1980)の用語の流用であるという高垣(1981)の論評も事実に基づかない。Bell は Klein(1977)の説を紹介する際にただ一度‘*implicitly negated assertion*’の表現を使用している。しかし、それを自説の術語とするための定義は与えられておらず、仮にそれが軽減主張の言い換えであったとしても、拙稿の示した「陰否性」と山と海ほど違う異質な実体を指す以上、模写概念どころではないのである。

「主張」と「否定性」のいずれかが記述上の便宜によって中心に据えられさえすればよいというものではない。対応する言語形式の有標・無標性、習得過程、談話及び発話構造上の有標・無標性などの説明と矛盾を含まないように考慮されなければならない。愚見によれば、「主張」もされずまた「否定性」も定かでない、かなりの領域の法判断が存在し、この部分が直説法＝主張説でカバーし切れない事例を出口(1981b)で示した。従って、「主張」を基本とするか「陰否性」に注目するかは、同じコインの単なる裏表でない〔cf. 出口(1981c:60)〕と考える。

1.2. 否定の連辞性

「否定」と「否定的態度」に関連する高垣のもう一つの批判は、それらが paradigmatic な関係になく syntagmatic に並んでいるという点で、補文中の否定と主文否定を分離すべきであるという立場を明確にしている(p. 87)。高垣の観点は、補文内の否定が叙法の選択に中立で、ある種の補文接続法は主文否定が引き金になるという従来の事実認定を繰り返したものであるが、拙稿(1981a, b)はなぜ補文の neg が法標識と関らず、上位文のそれが接続法を惹起するのか、ま

た独立主文は確かに否定命題を含む時にも何故接続法形をとることがないのかを統一的に説明する原理として「陰否性」を含む否定的態度なる概念を導入したのであった。

(1) a. No creo que la muchacha no sea bonita.

b. No creo que la muchacha sea bonita.

例えば、文(1 a)の法性(法 marker のみでない)^{#1}を考察する際、“la muchacha ser bonita”なる命題が抽出され、これを束縛する否定 operator を分離する必要があると考えるのである。これは次のような統語的証拠によっても確認可能である。

(2) —¿Crees que la muchacha no es bonita?

(3) a. —Creo que no.

b. —Creo que sí.

文(2)の返答としての(3 a)で no は(2)の補文全体に対する neg でなく、“la muchacha ser bonita”の否定であり、この命題部分が省略されている。同様に(3 b)の sí は命題 la muchacha no ser bonita の肯定演算子でなく、否定を含まない原初の proposition を仮定する必要性の根拠となっている。

例文(4)に対する反応(5 a. ~ e.)を考えてみよう。

(4) ¿No vendrán ellos?

(5) a. Tal vez.

b. Tal vez sí.

c. Tal vez no.

d. Sí.

e. No.

もし Terrell & Hooper (1974), 高垣 (1980) の主張するように、no を含む独立文が法的に一つの命題であるならば、話者・聴者はこの命題についてのみ諸々の epistemic 判断をなし得ることになり、(5 a, b)は共に(6 a)の解釈を持たねばならない。

(6) a. Tal vez no vendrán.

b. Tal vez vendrán.

しかし、実際は両文とも(6 b)にのみ解釈される。(5 c)の応答では no + (no venir) = venir を意味するのでなく、(6 a)の読みをとるだけである。ここでも聞き手は(4)に含まれる“ellos venir”という命題を受けとり、それに関して自己の法判断を下していることがわかる。(5 d, e)のケースでも‘彼等がくる’という原命題(prima proposición, cf. 出口1981 c)に対する否定・肯定とみなされるべきであろう。

「否定」「否定的態度」は意味クラスの分類である故、paradigmatic な関係に立ち、話者はある命題に対しどちらでも自由に選択できる。「否定」「否定的態度」に対応する表層構造で両者に含まれる否定要素の位置が syntagmatic である事実^{#2}と、意味単位あるいは発話行為の種別の範列

性とを混同してはならないであろう。高垣の所説は、補文の否定と主文内のそれは互に縄張りを持っていて、接続法を見る場合に主文否定のみに注目すればよいという点に要約されるが、拙稿 (1981b) が検討したのは何故主文の neg が叙法を左右する力を持ち、補文あるいは独立文の否定が影響を与えないのかの説明であった。高垣に従えば、叙法に係わる否定と係わらない否定の 2 種類を分類認定すれば事足り、補文内の否定は後者に属すから無視できるということであろう。しかし本質的に同じ“否定”なのに何故その差が生じるかについての説明に対する反対提案はなされていない。

1.3. 「陰否性」は雑居素性か

高垣 (1982 : 87-8) は拙稿 (1981b) が *desear*, *conseguir*, *alegrarse*, *ser natural*, etc. の補文接続法が主節句の意味による陰否性を帯びると分析したのをとらえて、

“こうした多様な性格の否定を一括して果して積極的定義といえるかどうか問題である”と批判している。ここで、*desear*, *conseguir*, *alegrar*, *ser natural*, *dudar*, *para que*, *cuando* などの各節をその雑多な意味にもかかわらず一括して陰否性とラベル付けされているかのように高垣は誤解しているようである。上述の各表現が均質一様な意味でないのは自明である。各述語の意味・語用論的内実を因数分解すれば、あるいは意味公準的に構成因子を一つずつ取り出して行けば、皆、共通因子“否定”を各々に連結する補文命題上に付着させていると考え、この特徴を「陰否性」とみなした。*desear* と *dudar* を例にとれば、共有される意味素が少ないにもかかわらず、弱い否定性がその補文に被せられているのを認めることができる。

(7) a. DESEAR → $X_1, X_8, X_{10}, X_{15}, \text{---} Y_6, Y_8, \text{neg}, Y_{20}, \text{---}$

b. DUDAR → $X_4, X_5, \text{neg}, X_{32}, \text{---} Y_1, Y_3, Y_4, \text{---}$

重ねて言えば、「陰否性」は (7a, b) で他の因子の間にはまり込んだ *neg* と operand との懸隔を指しており、 $X_1 \text{---} X_n, Y_1 \text{---} Y_n$ がどれほど異質であったとしても、比較的純粋で又単純な素性 (因子) であり、雑多なものを無理やり束ねているという非難はあたらないのではないか。「陰否性」は正にその特徴の存在によって規定され得るのだから、positive な定義である。一方、後で見ると高垣 (1982) の枠組で接続法に対応する“従属文性”は、独立文性の特徴「肯定・表述」を持たないものとして、negative な非積極的定義しか与えられていないのである。

1.4. 叙法決定のモデル

出口 (1981b) は叙法決定のメカニズムとして概略次のようなモデルを想定した (p. 32)。

(8) I. 陰否性の走査

a. 強弱の幅をもつ一定度の陰否性 → 可変的接続法性 → S U B J (形態論のカテゴリー選択の決定)

b. 上記 a に満たない陰否性 → 無標叙法 → I N D

II. neg の範囲に影響を与える前条件：直上主語以外の者が語用論的に前提する命題の真性

III. 走査の対象：(略)

上記に対し高垣（1982：89）には次の批判が見える：

“このモデルでは無視できない矛盾が潜んでいる。(I)の基本操作では主文に含まれる「否定性」が必要であった。接続法を有標の叙法として積極的価値が付与されている。一方、語用論的操作(II)は確かに否定 neg の作用範囲に制限を加えるように考慮されているのではあるが、それに加えるのは主文主語以外の誰か（話者もしくは別の第三者）の前提としてもつ命題の真性なのである。いわば他者の「主張」の介入を認めるのである。法選択という同一の過程を相反する基準で論じることが否定性説の論拠を著しく弱めることになる（下点、出口）”

上に引用した高垣の断定には無視できぬ論理矛盾や飛躍が含まれているので、やや詳しく見ておこう。(8)を示した拙文でも、他の論考（1981a, 1980, 1981c）のいずれにおいても、筆者は接続法が「陰否性」（高垣は否定性と言い換えている）と「主張」という相反する二基準で規定されると分析していない。語用論的に前提される真性が、neg の作用域に影響力を行使することを認め、その結果は従属節の直説法markerと結合することになるのである。前稿（1981b）は「主張」の概念が不要であると論じたのではなく、直説法が常に有主張と相関するという Terrell & Hooper（1974）説への反例を示したのであり、その結論を(9)で結んでいる。

(9) “直説法は語彙・意味・統語的な陰否性に染まらない積極的なあるいは受動的な真実性承認への話者側の加担から殆ど法実質を伴わない空標識への連続体として特徴づけられる (p. 35)”

(8)IIで考慮した否定の範囲に影響を与える前条件は、叙法の問題と切り離して意味分析にどのみち必要な条件であり、陰否性の領域がこのような独立の根拠を持った原則で自動的に説明可能な事実は、高垣の言うように論拠を著しく弱めるところか、逆にそれを補強するものと思われる。

上の高垣（1982）の論法は要するに法選択という一つの過程を相反する二つの基準で論じれば、無視できぬ矛盾が潜み、その論拠は著しく弱められることになるというのである。さて、この論法を高垣（1982）自身の立論や結論に適用して見ればどのようなになるだろうか。

高垣（1982：87）は文(10)の接続法は主文の“否定”が引き金となることを認める。

(10) Niego (Dudo, No creo) que la muchacha no sea bonita.

一方で、次文の法選択は命題を“肯定的”に認定し表述するためであると説明する (p. 92)。

(11) La muchacha (no) es bonita.

そこで次のように言えることになる：

“このアプローチには無視できない矛盾が潜んでいる。なぜなら法選択という同一過程を相反する基準で論じることが「肯定表述説」の論拠を著しく弱めることになるからである”

高垣（1982）は直説法＝独立文性、接続法＝従属文性と規定する (p. 105)。

“この結論には無視できない矛盾が潜んでいる。なぜなら法選択という同一過程を相反する基準

で論じることが「従属標識」説の論拠を著しく弱めることになるからである。”
無論、筆者はこのような粗雑な、あるいは‘翔んでる’論理で高垣の論考を評する意図を毛頭持たない。高垣（1982）が拙稿（1981b）を論難する手法をそのまま引き受け、シミュレーションを演技したに過ぎない。

1.5. 遂行文

出口（1981b：23）は無主張の遂行文主節が直説法に実現されるのは主張一元説の反例になることを指摘した。

(12) Te ordeno que salgas de aquí.

(13) Prometo que no volveré a hacerlo.

高垣は、例えば prometer が一人称現在直説法で用いられればどんな場合でも遂行文であると認めらしいのである。それは次の反論から窺われる。

(14a). — Te lo prometo.

— ¿Qué dices?

b. — (Digo) que te lo prometo.

“(14)から遂行文も命題を「肯定」的に「表述」《つまり主張》している事実は否定できない” 高垣1982：107〔下点及び（ ）内、出口〕

Austin（1962：64-5）で明らかにされているように1sg, 現在, 能動は遂行性の十分条件でも絶対的な必要条件でもない。(14b)における‘te lo prometo’は遂行的発言でなく, ‘私が約束する’という言葉を発している（あるいはむしろ発した）という事実を陳述しているにすぎない。te lo prometo の部分は約束行為の実行でなく, 非遂行的で, 約束するとの発言を確認しており, (14b)では digo が‘陳述’行為の遂行として発語されている。そこで digo 自体の直説法性を説明しようとすれば, 高垣の論法ではまた外側に陳述表現を作らねばならず, (15)の無限ループから脱出できなくなってしまう。

(15) digo que digo que digo que … que te lo prometo.

出口（1981b）は prometer に関して(14)のような用例での法 marker を問題にしたのではない。(12)(13)などが命令・約束の発語内力をもって使用される際, これらの主文に主張が含まれているという証拠が提出されていない故, (14)は Terrell & Hooper 説の擁護にも拙稿の指摘に対する反例にもなり得ない。(12)(13)文に限らず, 周知のように遂行文と同じ形状の文に限られた条件下で断定文・主張文としても用いられ得るが, その事が平常の遂行文として発語される時も直説法をとるという事実の説明にならないことは明白であろう。

ほぼ同様な事が(16)に類する epistemic modal（出口1981b：23）についても言える。

(16) Deben ser las once.

高垣（1982）は推定文の“推定”部分 i. e. deben が主張性を帯びる事例を提示していない。仮にそ

れが確認されたとしても、この種の *deber* を含む文が常時主張されていて、従って直説法実現をもつという論証にならない。

(17) *Es necesario que sean las once.*

高垣の拠り所とする(17)は(16)との意味上のズレが大きく正確なパラフレーズでない^{註3}が、*ser necesario* が“主張され得る”事と陳述緩和的 *deber* が“主張されている”かどうかは全く別の問題である。以上のことから、高垣の言及する例文や *paráfrasis* は拙稿(1981b)で考察した data に対する反例にならない。まして直説法＝主張説の論拠に役立つことはないであろう。

1.6. 感嘆文は主張文か

Terrell & Hooper (1974) 説に従えば感嘆文は叙実型評価節に支配されると分析される筈で、それにもかかわらず直説法が出現する事実に疑問を投げかけた(出口1981b:22)。高垣はこの指摘を批判しているが、その根拠や反例は示されていない。ただ次のような、評価節とは全く異なる派生をもつ故、直説法が正当化されると述べる(p.107)。

(18)a. *La muchacha es MUY bonita.*

→ b. *La machacha es QUÉ bonita.*

→ c. *¡Qué bonita es la muchacha!*

(18)の図式は感嘆文が程度副詞を含む断定(主張)文と同等であり、法的に同種であるという高垣の分析を表現したものと考えられる。しかし、感嘆文(18c)の基底構造に対し、独立主張文が設定されているから「独立文性」i. e. 直説法を示すというのは説明でなく、説明の棚上げであろう。それどころか(18c)に類する感嘆文の命題と主張文のそれが異なることを示唆するいくつかの証拠が存在する。

主張文(18a)には否定辞を加えて新たな主張文を作ることが可能であるが、対応する感嘆文(18c)の否定版は非文法的となる〔(19a, b)〕。

(19)a. *La muchacha no es muy bonita.*

b. * *¡Qué bonita no es la muchacha!*

c. * *¡Qué no bonita es la muchacha!*

これは、(18c)に含まれる命題の真性が前提されていて、しかも *no* + 命題が一つの真命題として扱われ得ないことを示しているように思われる。一方、否定命題を忌避するという点で感嘆文はある種の評価節と軌を一にする。

(20)a. * $\left\{ \begin{array}{l} \text{Es maravilloso que} \\ \text{Es una maravilla que} \end{array} \right\} \text{ la muchacha no sea bonita.}$

b. ? *Es admirable que la muchacha no sea bonita.*

(19)(20)の各例文は、従って、感嘆文が独立主張文よりも評価節に近いことを示している。

Comment クラス(感情節 subtype のケースでは主節が1人称の時)は一般に疑問文になり難

いが、これは感嘆文についても言える。

- (21) a. ?? ¿ Es maravilloso que la muchacha sea bonita ?
- b. ?? ¿ Me admiro de que la muchacha sea bonita ?
- c. ?? ¿ Qué bonita es la muchacha ?

上文が疑問文として成立するとき、その文意は命題の真偽価を尋ねる発語でなく、que を文頭に伴う疑問文タイプ(22 a – c)に相当する、不信の表明あるいは発話そのものを聞き返し確認する行為である。

- (22) a. ¿ Que es maravilloso que la muchacha sea bonita ?
- b. ¿ Que me admiro de que la muchacha sea bonita ?
- c. ¿ Que qué bonita es la muchacha ?

これに反し、(18 a)に対応する疑問文(23)は、通常解釈で、命題の真偽を問う質問として発せられる。

- (23) ¿ Es muy bonita la muchacha ?

文(23)が(21 c) (22 c)と同義で用いられることがあっても、後者が前者の unmarked の解釈あるいは同じ外延を持ち得ないのは明らかであろう。この点でも感嘆文は独立主張文と離れ、評価節との親近性を示す。

主張文(18 a)は quizá など疑惑の文副詞を含む、直説法・接続法両形の文と対置されるが、感嘆文動詞はこの交替を許さない。

- (24) a. Quizá la muchacha es muy bonita.
- b. Quizá la muchacha sea muy bonita.
- (25) a. Quizá, ¡ qué bonita es la muchacha !
- b. * Quizá, ¡ qué bonita sea la muchacha !

もし感嘆文が(18)の図式のように副詞 MUY に qué が交代しただけの独立主節であるのなら、
“主張的”主節の下に que を介して従属されてしかるべきである。

- (26) a. Creo que la muchacha es muy bonita.
- b. La muchacha, creo que, es muy bonita.
- (27) a. * Creo que qué bonita es la muchacha.
- b. * Qué bonita, creo que, es la muchacha.

ところが(27 a, b)は共に許容性が低い。

上に略述した統語的特色は、感嘆文が独立主張文から派生するという見方(高垣1982)に対し疑念を投げかける。感嘆文が直説法動詞を含むから主張文と同等であるというのではなく、主張性、若くは「肯定的」な「表述」を含んでいるという独立の証拠が提出されなければならない。特に、高垣(1982)では否定命題も「肯定的」に表述されると規定されているから例文(19 b)が阻止されない点にも留意する必要がある。

II

第2章は接続法が単なる従属の標識であるとする Harris (1974, 1978) の持論を採り入れ、これを Terrell & Hooper の「主張」有標説と合体させようとする高垣 (1982) の試みを取り扱う。

2. 1. 独立文性と従属文性

高垣 (1982) によれば、「独立文性」とは“ある命題を肯定的に認定して表述するはたらき”であり、「従属文性」は独立文のもつ‘肯定・表述’という条件の一部ないしは全部を欠くことを指すと規定される (p. 92-3)。そして独立文性、従属文性と叙法の関係は次のようになるという。

(28) 直説法＝独立文性 (命題を肯定的に表述)

接続法＝従属文性

以上の手続きの後、高垣は“独立文が直説法をとり、独立文性をもたない従属文は接続法に甘んずることが明らかになった”と結論づける (p. 95)。しかし、ここで注意しなければならない重要な点が二つある。

まず第1に、独立文性 (= 肯定・表述) を有標とし、残余を従属文性と定義して、後者を特徴づける positive な共通特条が抽出されていない事実である。すなわち、従属文性には独立文性の特徴である「肯定・表述」から独立した定義が与えられておらず、結局それは「独立文性」の elsewhere に他ならない。言い換えれば、これは Terrell & Hooper 説で登場した“非主張”に通じるし、また、“直説法／接続法の何れか一方を有標と見做すアプローチでなく両法を同時に積極的に特徴づけようと試みた (p. 105)”という高垣自身の言葉にも矛盾する。主張＝直説法を有標とし、その補集合を接続法に充当する分析がはらむ多くの問題点については拙稿 (1981b) で詳述したので再論を控える。

第2の点は、“ある命題を肯定的に認定し表述するはたらき”という意味 (及び談話的) 機能に対して巧妙な統語的呼称「独立文性」が付されている事実である。独立文 (節) 従属文 (節) は伝統的に文構造に関する統語的用語であり、規定方法に異説があるとしても、スペイン語では比較的明瞭な形式的区別がなされ得るものと考えられる。“肯定・表述”を「独立文性」と呼んでも「主張」と名付けても同様に、そのこと自体でもって直説法が統語的範疇である独立文と結びつけられることにはならないのである。高垣は“独立文が直説法をとることが明らかになった”と述べるが、そうではなく、直説法を独立文性あるいは独立文性を直説法と初期設定されただけで、独立文→直説法 or 独立文→独立文性はなお未証明の課題であることを見逃がしてはならない。同様に、「従属文性」と「従属文」は (少なくとも高垣の用語で) 異質な異次元の概念であるにも拘らず、等価あるいは後者が必然的に前者に内含されているかのようにみなされている。

従属文が従属文性を持つ故接続法をとるというのは接続法の説明として不十分である。何故な

ら、どうして〔統語カテゴリーの〕従属文が「肯定・表述」を欠くのかという根本問題が明らかにされていないからである。小論は、法性及びその部分的反映である叙法はシンタクシスの“従属”、“独立”と表裏一体の明快な対応を持たないという立場に立つ。その根拠は§ 2. 2 ~ § 2. 4 で触れられるであろう。

2. 2. 従属と非主文性

出口 (1982 b) は文と文の統語関係の緊密度と指示詞 (→接続詞→補文標識) の関連を探ったが、これを一種の‘従属の度合’とみなせば、この尺度は直説法文にも接続法の文にも該当する。

- (29) a. Digo esto. No le perderé de vista.
- b. Digo esto, que no le perderé de vista.
- c. Digo que no le perderé de vista.
- (30) a. Te aconsejo esto. No le pierdas de vista.
- b. Te aconsejo esto, que no le pierdas de vista.
- c. Te aconsejo que no le pierdas de vista.

(29 a) (30 a) で前後文の間に談話文脈によって esto と後続独立文が catáfora をなし得るが、両文においてこの代名詞は別の指示対象を持ち得る。しかし統語上、前文と後文の間に従属関係を認めることはできない。(29 b) (30 b) の que 節は各々 (29 c) (30 c) の補文より主節に対する従属度が小さいであろう。(b) 文における que 節は、主文の中性指示詞と同格関係で、pause を置いて並置されるが、これらの esto は後続節以外の referent をもたない故、各 (a) 文よりも従属の度合いが大である。上の例文で叙法が従属度に対して有意な対照を見せているとは思われない。

また叙実補文節内部でも緩い同格的並列 (i. e. 独立度が大) から緊密な従属までの段階を認めることができる。

- (31) a. Eso, el que venga, me ilusiona mucho.
- b. Eso, que venga, me ilusiona mucho.
- c. El que venga me ilusiona mucho.
- d. Que venga me ilusiona mucho. (Carratalá 1980 : 199)
- (32) a. Ello me inquieta, que hable Juan.
- b. El que hable Juan me inquieta.
- c. Me inquieta que hable Juan. (Manteca Alonso-Cortés 1981 : 122-3)

ある種の統語操作が直説法文に適用可能で、接続法従属節に行うと非文が生じるケースについてかなりの議論が重ねられてきた。ここでは法対立を見せる理由節の例を見てみよう。

- (33) a. Me voy : tengo prisa.
- b. Me voy, que tengo prisa.
- c. Me voy porque tengo prisa.

- (34) a. * No me voy : tenga prisa.
 b. * No me voy, que tenga prisa.
 c. No me voy porque tenga prisa.

上例(34 a, b)は同(c)と同じ意味で成立せず、直説法理由節の(33 a, b)と比較される。Manteca Alonso-Cortés (1981 : 68-9)は接続法の理由節が主文中に挿入できるのに対し、直接法の porque 節が不可であると指摘する。

- (35) a. No va al teatro porque aburre.
 b. * No porque se aburre va al teatro.
 (36) a. No va al teatro porque se aburra.
 b. No porque se aburra va al teatro.

(33)–(36)に見られる差異は直説法が固有に持つ統語的特性に帰されるのであろうか。仮にこの特性を「主文性」⁴⁴と呼ぶならば、(34) a, b が非文で(36 b)が可能なのは接続法が主文性を欠く、あるいは強い「従文性」⁴⁴を持つためであると見るべきであらうか。

主張性の有無をテストするために利用された補文前置の可否もこのような主文性の大小と関連づけられることがある。即ち、直説法・接続法を含む文が見せる統語的諸特徴が叙法範疇そのものの、あるいはそれらの行動特性を包括するグローバルな素性に原因を求めるアプローチである。本稿はこのような接近法と異なり、これらの現象は叙法の背後にある法概念 i. e. 意味論的な動機をもつのではないかと考える。言い換えると、叙法分立の深部で働く法概念が直説法／接続法の形態論的対立、構文上の他の behavior の相違として顕在化すると分析する。叙法カテゴリー自体も一つの表徴と見られるわけで、他の表徴と共に現われることが多いが、常に外延が平行しているとは限らず、また相互間で直接の因果関係を持たない。例文(34)に即して言えば、この porque 節が接続法語形を含むから、(34 a, b)が不可なのではなく、理由節が主文の否定領域内にあって、陰否性を帯びる故に、主文の否定から分断され得ないと考える。又この陰否性が出口 (1981 b) で見たように(34 c)文の接続法実現の要因でもあった。反対に(36 b)の接続法従属節が主文中に移動できるのは、(35 b)と異なり元々 porque 節が主文否定の作用域内にあったためである。

対置される接近法と小稿のそれを簡略に比較すれば次のようになるだろう。

- (37) A. 「接続法」 → 「非主文性」 → 統語差異 v. g. (33)–(36)他
 B. 「非主文性」 → 接続法 → 統語差異
 C. 「非主文性」 $\left\{ \begin{array}{l} \rightarrow \text{接続法} \\ \rightarrow \text{統語差異} \end{array} \right.$
 D. 本稿
 「陰否性」 $\left\{ \begin{array}{l} \rightarrow \text{接続法} \\ \rightarrow \text{統語差異 v. g. (33)–(36)} \\ \rightarrow \text{その他} \end{array} \right.$

A, B, C はいずれも非意味的アプローチである点で D を区別される。A 説では接続法は形態上の対立を持つ所与のカテゴリーとされ、包括的な特徴群である「非主文性」を示す。ところが、具体的な統語差異（例えば③③—③⑥もその一部に含まれる）でもって非主文性が規定される一方、今度はその非主文性によって様々な従属文らしさの現われとなる現象が説明されるという循環に陥ってしまう。B, C 説もまた同じような難点を免れ難いと思われる。

2.3. 接続法は従属標識か

Harris (1974, 1978) はラテン語からロマンス諸語への過程で接続法が empty marker になる傾向を加速して来たと指摘し、特に仏語で従属の標識 (a marker of subordination) に変容したと分析している。高垣はこの観点を現代スペイン語の共時体系にも当てはめ、その論題に『従属標識としてのスペイン語接続法』をうたっている。

スペイン語接続法の事例の多くは従属節に見られ、かつその法標識自身が対立価を持たないという意味で非機能的である場合が多いことは広く認められている事実であろう。だが、この状況下で Harris (1974, 1978), 高垣 (1982) のように、接続法を従属標識と認定するには少なからぬ論理的矛盾を黙殺せねばならないだけでなく、この説の土台を掘り崩す現実のデータも存在する事実に留意する必要がある。

接続法標識が 'empty marker' になり下がったという認識は接続法を要求する法概念が意義を失ったことに直に繋がらない。命令、疑惑、感情 etc. の主節に支配される従属節に“余剩的”に接続法が生起するのをとらえて、接続法が従属の標識であると述べても、それは問題の出発点であって、解決ではない。接続法があらゆる従属節に義務的に、あるいは無差別に出現する状況が生じていない以上、たとえ余剩的にせよ、どのような条件下で接続法形が生起するかを規定せねばならない。即ち、接続法を含む従属節の種類 (or 意味範囲) が直説法のそれと時に対立的で時には相補的であっても、法性そのものは健在である事実が等閑に付されているようである。Harris (1974, 1978) は“従属の”ではなく“ある種の従属の” empty marker になっている、とより正確に述べるべきだったであろう。叙法に関する議論は、実に、この“ある種の”はどのような範囲を指し、どのように一般化するかをめぐる展開されて来たのであって、この部分を欠落させることはできない。

接続法と称されている形態論的範囲が、直説法 marker との相補性・対立性と完全に訣別し、独自に従属節でのみ使用されるような状態になった時に始めて Harris (1974, 1978), 高垣 (1982) のように接続法を従属標識と規定することが可能であろう。^{③⑤}

拙稿 (1981c, 1982a) は現代スペイン語の叙法と法性についての小規模な頻度調べを試みた。その資料の一部を③③に抄録しよう。

③③^{③⑥}

A. 接続法標識の分布

従属節全体の定動詞	1,008	
直説法	863	85.6%
接続法	145	14.4%

B. 従属節の動詞形態

総数	1,861	
接続法	145	7.8%
直説法	863	46.4%
不定詞	717	38.5%
現在分詞	136	7.3%

C. 接続法性〔命令 marker, 接続法 marker で実現される〕の生起

総数	293	
主節	148	50.5%
従属節	145	49.5%

上表から、従属節の法 marker としての接続法は直説法より遙かに低率で全体の 1 割強に過ぎないこと、また従属節の標識全体を考慮すれば、接続法はわずか 7.8% で、この形式が従属節を指標化する主務を帯びているとはみなし難いことがわかる。接続法＝従属標識説にとって致命的なのは (38) C. が如実に示すように、接続法 marker の背後にある法性は従属節にも主節にもほぼ同率で出現する事実である（不定詞・現在分詞を除く）。接続法の高率が予想される名詞節内の叙法だけを見ても、直説法が接続法の 2 倍以上に達するという集計もある（Keniston 1967: 154-168）。

(39) 名詞節内の定動詞	4,672	
接続法	1,530	32.7%
直説法	3,142	67.3%

このような度数 data に見る限り、実使用面の様相は接続法が一般的な従属 marker と機能していないことを示唆していると考えてよいであろう。さらに、接続法が従属節に生起するとき殆ど常に que その他の紛う方無い従属標識が明示されていて、敢て新種の marker で補強されなければならぬ必然性が見られないということも考慮すべきであろう。

因に、もし高垣（1982）の論旨が、接続法を従属標識とみなすのでなく、従属文性の標識であることを意図しているのであれば、接続法を“非主張”と関連づける Terrell & Hooper（1974）説と本質的に違わないものになる。ただし次節でも見られるように、高垣（1982）の論点は接続法と「従属文（節）」の相関あるいは同一性を強調するところにあると思われる。

2.4. QUE_{ind} と QUE_{subj} の根拠

文(40 a, b)が同じように従属節を含んでいるとすれば「接続法＝従属標識」説に不都合であるため、高垣（1982: 95）は前者が実際は(41)の等位的結合として解釈されると述べる。

(40) a. Creo que_{ind} viene.

b. No creo que_{subj} venga.

(41) yo lo creo : él viene.

ここで表層形式は(40 a)だが、“表層の解釈”は(41)であると説明されている。表層の句構造標識とは別個に上例のような直説法補文に対してのみ、統語構成を大幅に変更する新たなルール若くは装置を設けて(41)の情報が付与されるらしいのである。この mapping は専ら文の統語組成を示すもので、意味解釈規則と独立したものである筈である。しかし、何故(41)のような構造系が各々の直説法補文に対しのみ必要なのか、その理由と理論的メカニズムが明らかにされなければならない。

また上の手順を行うために que_{ind} と que_{subj} の2種類の従属接続詞を仮定する必要があると主張されている。これは音韻論で大方の不評を買ったあの Absolute Neutralization の統語版ともいべきアプローチである。実際、高垣は現代スペイン語のシンタクスから、二つの“que”〔que 補文でない〕が指定されるべき根拠を見出していない。スペイン語と同じくラテン語から派生したルーマニア語で2種の従属接続詞を区別しているのが、que_{ind} que_{subj} 設定の傍証になるという。

(42) a. Știam că are talent.

b. Nu știu să aiba rude.

(高垣1982 : 95)

しかし、să が că と paradigmatic に対立する従属接続詞であるとする分析に全然異論がないわけではない。次のような文で補文標識はむしろ ca であり、この補文内に更に別の comp să が含まれているのは不自然であろう。

(43) Vreau ca Ana să vină cu noi.

‘I want Ana to come with us.’

(44) E posibil ca Ana să fie acasă.

‘It is possible that Ana is home.’

(Farkas 1982 : 78-9)

また(45 b)で să を接続詞とみなしなければならぬ根拠は弱い。

(45) a. Caut o fata care știe englezește.

b. Caut o fata care să știe englezește.

‘I am looking for a girl who knows English.’

(idem : 93)

そこから、語源はともあれ Farka (1982 : 75) のように să を接続法法標識とする見方も生まれてくる。仮に că と să が間違いなく接続詞であったとしても、că が等位構造を内含しており să は額面どおり“従属”を示しているという点は未証明である。

いずれにせよ que_{ind} がその外面の従属性の衣の下に等位接続構造を隠しているという主張は相当無理なつじつま合せなしには成立しないだろう。

2. 5. 評価節と主題

(46)のような評価節(感情節)補文に関しては接続法／直説法の交替が指摘されて来ている。

(46) a. Me alegro de que hayas salido bien.

b. Me alegro de que has salido bien.

「主題」を伝達の側面のカテゴリーの旧情報と同義の換称と規定した上で、高垣 (1982) は(46 a) の従属節が既知の情報で文にとっていわば背景的素材で取って「表述」されるに到らない故に、接続法が圧倒的に使用されると説明する。

新旧情報 (焦点・前提) の正確な分岐点がどこにあるかの困難な問題はさておき、スペイン語叙法と情報価とは高垣の指摘するような因果関係を持たないのではないかと考えられる。なぜならば、補文が接続法標識を含みながら文の新情報 (焦点) 部分として伝達され得ることは次の例文で確かめられるからである。

(47) a. De lo que me alegro es de que hayas salido bien.

b. Lo que me alegra es que hayas salido bien.

また、(48)のように接続法形を含んでいる補文節を対照的に並列することも可能である。

(48) No me alegro de que tú estés aquí, sino de que esté tu mujer.

主観的評言の下位種別^{#7}においても類例を認めることができる。

(49) Lo bueno es que salgas ahora mismo.

(50) Lo peor es que no lo sepan todavía.

上文のいずれにおいても評価節は題述 (Rheme) に指定されているはずであり、高垣の提案する、旧情報 = 背景的素材 = 主題 ⇨ 接続法では解決がつかないのである。

他の補文タイプをも一瞥すると、例えば、(51 a) の類文で mando が題述であり、補文が主題であると高垣 (1982: 99) は述べている。

(51) a. Te mando que no vengas.

b. No vengas.

陳述文として (51 a) が用いられる場合を除き、この種の命令は通常 (51 b) で実現される。つまり普通の読みで Te mando (que) は省略可能な部分 i. e. 旧情報 (= 主題) であることを示しており、"no vengas" が両文において題述であろう。また mandar に関連する命題が焦点位置に出現することの明らかな分裂文でも叙法は変化せず接続法である。

(52) Lo que te mando es que no vengas.

「命令」類の述語においても、主題／題述の関係が従属文性／独立文性と密接な関係を持たないことが確認される。

文の構成部分とその全体に対して占める重要度が伝達される機能的 strategy は主に語順、強勢、音調に負うのであるが、更に叙法がその役割を荷うという分析の論拠は示されておらず、逆にその反例が存在することを本節で見た。

(1982年 8 月25日)

注

1. 叙法と法概念・法性は区別され用いられている。cf. 出口 (1981a, 1982a)
2. 例外なく連辞的であるとは断定し難いのではないかと思われる。例えば, Neg Raising の現象は両者が統語上もある種の互換性をもつことを示唆する。
3. (17)は例文(16)の根源的助動詞 (root modal) の読みに対応する。接続法補文を含むこの「必然性」は一種の評価文である。推測文(16)内の命題は下例 i) ii) に近く主張節であろう。
 - i) Hay indicios de que son las once.
 - ii) Serán las once.
4. 「主文性」・「従文性」は統語的 cover term で高垣 (1982) の独立文性・従属文性と別概念である。
5. 接続法=従属の法を正当化するには更に厳しい条件が課せられなければならないという見解もある: Mariner Bigorra (1971: 219-220)。
6. 高垣 (1982) との照合を容易にするため, 本稿では前稿 (1981a, b, c, 1982a) で別法とした「推定法」を直説法に算入して集計した。
7. el hecho de que, el que などに導かれる叙実節に否定性が感じられないと高垣 (1982: 88) は出口 (1981b) を批判している。このタイプの従属節は判断留保, 断定緩和に起因する「陰否性」に関連づけられることを拙稿 (1982a, I 3.) で論じたのでここでは触れない。

* 本稿中のスペイン語例文については, 関西外国語大学の Germán Arce 氏の判断と有益なコメントに負うところが大きい。この機会に感謝の意を表しておきたい。

** 小稿は“叙法をめぐるいくつかの論点”の題で, 出口 (1982b) と同時に口頭発表された内容の一部を加筆, 修正したものである。

REFERENCES

- Bell, Anthony (1980). Mood in Spanish: A discussion of some recent problems. -Hispania 63, 377-390
- Carratalá, Ernesto (1980). Morfosintaxis del castellano actual. Barcelona.
- Farkas, Donka F. (1982). Intensionality and Romance subjunctive relatives. IULC.
- Gili Gaya, Samuel (1971). Curso superior de sintaxis española. Barcelona.
- Harris, Martin (1974). The subjunctive as a changing category in Romance. In John Anderson and Charles Johns (eds.): Historical Linguistics II. Amsterdam.
- (1978). The evolution of French syntax. A comparative approach. London.
- Keniston, Hayward (1967). Spanish syntax list. New York.
- Klein, Philip W. (1977). Semantic factors in Spanish mood. -Glossa 11/1, 3-19
- Manteca Alonso-Cortés, Angel (1981). Gramática del subjuntivo. Madrid.
- Mariner Bigorra, Sebastián (1971). Triple noción en la categoría modal castellana. -Revista de Filología Española 54, 209-252
- 高垣敏博 (1981). El subjuntivo como marcador de subordinación. 第63回関西スペイン語学研究会口頭発表. 1981. 10. 25
- (1982). 従属標識としてのスペイン語接続法—京都産業大学論集 Vol. 11, No. 4, 84-110
- Terrell, Tracy and Joan Hooper (1974). A semantically based analysis of mood in Spanish. -Hispania 57, 484-494
- 出口厚実 (1980). Mood, modal, and tense in Spanish. -Lingüística Hispánica 3, 87-101
- (1981a). ムードとモード: スペイン語における法性をめぐって—Estudios Hispánicos 7, 59-71
- (1981b). 接続法と陰否性: スペイン語叙法分析の一視点—大阪外大学報52, 19-37
- (1981c). 叙法の裏表: スペイン語不定詞の法の裏側—第1回 SELEK 口頭発表. 1981. 7. 27
- (1981d). Notas sobre la negación. -Lingüística Hispánica 4, 47-62
- (1982a). スペイン語における叙法と法性—大阪外大学報 56, 1-16
- (1982b). Pro-formas y variables en español. 第65回関西スペイン語学研究会口頭発表. 1982. 1. 30